

# 社会運動理論と関係社会学

同志社大学 鶴飼孝造

## 【1 目的】

社会運動（アメリカでは集合行動および集合行為といわれることも多い）の研究においては、伝統的に階級階層などの社会構造や権力構造の分析が重視されてきたが、次第に運動を生み出す社会や集団に埋め込まれている関係性や、運動の展開プロセス（政府や他の運動との相互作用）に焦点が当てられるようになった。この報告では、その理論展開を詳しく検討することによって「関係社会学」との関連を明らかにしたい。

## 【2 方法】

社会運動研究を大きく関係社会学的方向に牽引したのが Charles Tilly である。彼は社会運動の歴史社会的な研究を中心におこなっていたが、それまでの構造分析の不十分さを指摘しつつも、一般理論への拒否感から、膨大な業績の中でもなかなか体系的な理論化を進めることができないでいた。しかし、1997 年からコロンビア大学に移り、社会ネットワーク研究の泰斗 Harrison White との研究交流が進む中で、二人は、〈関係社会学のニューヨーク学派〉を形成しはじめる。この交流は、Tilly の研究の理論化をうながしただけでなく、ネットワーク研究における数理的な方法の展開によって既に〈ハーバード革命〉を起こしていた White にも、文化的要素を取り入れた研究の質的転換をもたらしている。したがって、本報告では、二人の晩年の研究の変化に焦点を当てることによって、〈関係社会学〉の背景や基本要素を明らかにする。

## 【3 結果】

Tilly は 1970 年代から network 研究を導入したり、catnet という概念を提唱するなど関係の理論化に取り組んでいた。それは同じ階層や集団に属していても、埋め込まれた関係性や運動体がすでにもっているレパートリーによって運動の展開が異なるからである。White も、関係性をあらわすネットワークにおける主体性をどう概念化するかに取り組んでいた。二人がいた 1990 年代から 2000 年代にかけてのニューヨークでは、グローバリゼーションの先端にあると同時にテロなどの紛争が多発する。White はそれまでもネットワーク研究の事例として親族構造や様々な市場に注目していたが、ネットワークが形成される原理や文化的な背景の多様性をどう理論に組み込むかという課題に直面した。Tilly も歴史的な変化や紛争が眼前で起こる中で、ネットワークの〈境界〉がどのようにシフトし、それはどのような原理で動くのかをいかに理論化するか試行錯誤を重ねる。例えば、二人は主体をあらわす概念として identity を用いるが、それは個人でも集団でもない、物理的社会的環境（control）との相互作用によって境界をシフトさせる領域をいう。またネットワークが生成消滅するのは、control との相互作用の中で用いられる story により、ネットワーク内での論理（discipline）は、ある時は効率であり選別であり、また権威であるとされる。このような理論化の方向はそれまでの二人の論理的かつ客観的な方法論からすると、主観的・文化的な方向への大きな転換だと言わざるを得ない。

## 【4 結論】

Tilly と White による運動研究とネットワーク研究の方向転換は、関係社会学一般に見られる傾向とは言えないし、対象の実体が見えにくい方法には批判も多い。しかし、それは若い研究者から支持が強いブルデュー社会学や、ジンメルに遡る相互作用論の系譜を、21 世紀における関係性の認識を重視する社会学に架橋する貴重な営みであったと結論づけることができる。